

# 日本における体育哲学の学的形成に関する研究

— 1920年代の數川與五郎の「体育哲学」を中心に —

高田 哲史

(2007年10月4日受理)

A Study on the Formation of the Philosophy of Physical Education in Japan:  
Kazukawa Yogorou's "Philosophy of Physical Education" in 1920s

Tetsushi Takata

**Abstract.** The name of the philosophy division of the Japanese Society of Physical Education was changed from "the principles of physical education" to "the philosophy of physical education" in June, 2005. The title "philosophy of physical education" was formally recognized at that time. However, the philosophy of physical education had been argued before that, because we could find books, journals, and magazines which included the discussion in terms of the philosophy of physical education already in 1920s. This paper examines the discussion of the philosophy of physical education by Kazukawa Yogorou. He argued the issues on "genuine physical education," "idealism of physical education," and "the construction of the academic discipline of physical education." His interests have the commonality with the ones of the current scholars of the philosophy of physical education: an inquiry into the essence of physical education, and the foundation of the academic discipline of physical education. Therefore, we can designate the early formation of the philosophy of physical education in 1920s in Japan.

Key words: the philosophy of physical education, the principles of physical education

キーワード：体育哲学，体育原理

## 1. はじめに

2005（平成17）年6月の日本体育学会総会で、「体育原理」専門分科会が「体育哲学」専門分科会と名称変更された<sup>1)</sup>。1950年の体育学会発足当時の「体育原理」the principles of physical educationから、「体育哲学」the philosophy of physical educationに変わった。長年、体育原理か体育哲学かで論争されていた問題に一応終止符が打たれた。

本論文は、課程博士候補論文を構成する論文の一部として、以下の審査委員により審査を受けた。

審査委員：樋口 聡（主任指導教員）、土橋 寶、  
木原成一郎

体育哲学への名称変更がなされ、「体育哲学」は公的に認知されたが、実際には「体育哲学」は体育原理の枠組みの中で多くの体育研究者によって論究されてきた。まず1960年前後に川村英男<sup>2)</sup>や石津誠<sup>3)</sup>が彼らの著書の中で体育の哲学的考察を行い、事実上体育哲学を論じている。そして阿部忍が1970年代に『体育哲学』を著し、戦後いち早く体育哲学の体系化を試みた<sup>4)</sup>。阿部は「日本における体育原理は、体育の本質とか、体育とは何とか、あるいは目的、目標というものを論じているが、むしろその内容は体育哲学の内容である<sup>5)</sup>」と述べ、それゆえに体育原理から体育哲学への名称変更が必要であると主張した一人である。さらに1970年代には篠田基行も体育哲学の必要性を述べている<sup>6)</sup>。

一方、1970年代には吉澤宗吉<sup>7)</sup>、篠田基行<sup>8)</sup>らが海外の体育研究者の体育哲学に関する著書の翻訳を行っているし、スポーツ哲学の分野では、阿部忍・飯塚鉄雄<sup>9)</sup>、片岡暁夫<sup>10)</sup>らが海外のスポーツの哲学的考察を紹介している。このように1960年前後から1980年代にかけて、体育哲学やスポーツ哲学の論議がみられる。こうした気運は「国際スポーツ哲学会」や「日本体育・スポーツ哲学会」の設立・発展とともに、研究の蓄積を生み、体育哲学の公的な認知を促したと考えられる。

とりわけ、体育哲学の名称変更が大きく貢献したのは1990年以降に活躍している体育研究者たちである。なかでも佐藤臣彦は体育哲学の名称変更に多大の功績を残している。彼は次のように述べる。

「体育原理」と言う名称は、アメリカの「Principles of Physical Education」(以下、PPE)に基づくものとされている。しかし、実のところ、アメリカの「PPE」は、彼の地において哲学的な領域とは見なされていない。(省略)「体育諸科学」と「体育実践」とを媒介する知識・知見の集合体であり(省略)、体育諸科学がすでに明らかにしている研究成果を体育実践にできるだけ有効に役立てるため、利用・活用の見地からアプローチしていく、いわば技術的性格を持つ領域である。他方、前川先生や川村先生が標榜する「体育原理」は、体育諸科学の成果を批判的に検討しつつ、究極的には「体育とは何か」という根本問題に答えようとする、まさに哲学的な学問分野としての性格づけがなされている<sup>11)</sup>。

佐藤は、従来体育原理として扱っていた内容は実は体育哲学が扱うべき内容であったし、現在の体育原理はそれゆえに体育哲学に名称変更することが望ましいと述べた。佐藤は『身体教育を哲学する』を著した<sup>12)</sup>。

また、樋口聡<sup>13)</sup>や瀧澤文雄<sup>14)</sup>、さらには関根正美<sup>15)</sup>らの体育研究者も体育、スポーツの哲学的研究に積極的に取り組み、体育哲学の発展に寄与している。

このように、戦後の体育哲学研究は、石津誠、川村英男、阿部忍、篠田基行、片岡暁夫たちにより基盤が作られ、さらに1990年代に入り、佐藤臣彦を中心に哲学的な研究へと展開していき、体育哲学の名称変更につながったといえることができるだろう。ただ、体育哲学に名称変更はされたが、佐藤も述べたPPEとしての体育原理の役割についてもその重要性は誠に大なるものがあり、その役割はどのような形で果たされなければならないか、など、まだまだ体育哲学専門分科会としての課題は多い。

ところで、我が国における体育哲学について、体育原理の中での中心的な論議は、やはり「体育とは何か」という本質論であった。1960年前後の体育哲学としては、石津が「この絶対的な限界を有する現象的世界における体育の構造を究明することは、現代人としての歴史的人間の育成を目ざす、体育の根底である」<sup>16)</sup>として、現象学的に体育の構造究明をした。また、川村は「人間の本質」を体育の本質として、やはり「体育とは何か」を論じた<sup>17)</sup>。また阿部も「体育とは何か」を論じつつ、その内容として(1)対象論、(2)内容論、(3)方法論に分け体育の本質究明を行った<sup>18)</sup>。

一方、篠田は体育本質論に加えて、体育哲学の原初的形態を論じ、体育における哲学的論議の必要性を述べ、体育学における哲学的基礎づけを行っている<sup>19)</sup>。これについては1990年以降の体育哲学で、佐藤が体育学における体育哲学の位置づけを明確にし、体育諸科学の一領域としての体育哲学を論じ、体育学の基礎づけを行った。樋口も体育哲学の方向性を論じる中で、体育学の基礎づけが体育哲学の研究内容であると述べている。

これら戦後の体育哲学の研究対象をまとめると次の2つにまとめられる。一つは体育の本質究明、二つめは体育学の基礎づけであり、いずれも体育に関する批判的検討を前提としている。

以上、戦後体育原理専門分科会で論議されてきた戦後の体育哲学の経緯をみてきたが、筆者は前川峯雄の体育学を調べているうちに、戦前にもこのような体育哲学の論議が日本にはなかったのだろうかという疑問をいだいた。そこで、明治以降から第二次世界大戦直後までの体育に関する文献の中で、体育哲学もしくは体育を哲学的に考察している論文を検討したところ、戦前にも「体育哲学」の研究がなされていることが明らかになった<sup>20)</sup>。そこで、その戦前に行われた体育の哲学的論議の概要をまとめ、その中で体育哲学はどのように始まり、その学的形成はどのように推移していったのかを論究しようと考えた。そうすることにより、筆者は戦前にも体育哲学の学的形成があり、それを体育哲学の萌芽として認めることができるのではないかと考えた。

従って、本研究は日本における戦前の体育研究の動向を検討した上で、日本で初めて体育哲学の構築を考えたとみなすことができる数川興五郎の体育哲学を中心に、その学的形成がどのような内容のものであったのかをまとめ、それが体育哲学の学的形成の萌芽と見なしうるかどうかを論究することを目的とする。

## 2. 体育哲学以前

明治以降の体育研究史を調べていくと、まず1878年の体操伝習所設立に関する公文書において「體育に關する諸學科」がみられ、その具体的内容としての「體操術」が記述されているが、それらは体操の技術や方法に関するものであった<sup>21)</sup>。続いて1900年代年初めに高島平三郎の『體育原理』<sup>22)</sup>による体育の理論的研究が現れるが、この時期にはまだ体育哲学、もしくは体育の哲学的考察に関する言説はほとんどみられない。ただ高島の『體育原理』には「心身相關論」の項で、哲学の知識を役立てる必要性が説かれている<sup>23)</sup>。同時期の日本体育会や文部省の研究書には、体育の理論的研究の必要性が述べられているが、これらにはいずれもまだ「体育哲学」という用語は登場していない。

## 3. 体育哲学の始まり

体育研究書や論文に体育哲学や体育の哲学的考察に関する用語が数多く登場するのは1920年代から1930年代にかけての時期である。前川峯雄は、戦後すぐに発刊した『體育學の課題』（1947年）の中で次のように述べている。

體育の學的研究に従事しようと考へてから、かれこれ二十年近くにもなつたかと思はれる。この二十年間は、體育學自體にとつて、極めて重要な時期であつた。即ち、「體育學」が「學」として公の問題になるやうになつたのはこのころからであり、また方法や指導に限定されていた従来の體育研究の上に、體育の本質に關する研究が各方面から行われるやうになつたのもこの時代である<sup>24)</sup>。

この前川の記事から、1920年代から1930年代にかけて体育学が学として取り込まれるようになり、従来方法や指導に限定されていた体育研究から、体育の本質に関する研究が各方面から行われるようになったことが解る。この時期には『體育』や『國民體育』<sup>25)</sup>、『體育と競技』<sup>26)</sup>などの雑誌がつつぎと発行されている。この1920年代から1930年代にかけて「体育哲学」という名辞が多く論文、雑誌にみられるようになる<sup>27)</sup>。

当時体育を哲学しようという機運が大変高まったことは間違いない。それは、前川が言う「當然なければならぬと思はれるような統一的な基礎的な理論はどこにも見られなかつた」<sup>28)</sup>それまでの学的状況にもかかわらず、体育哲学という用語が多く論文にみられるようになり、新しい学的形成の努力が行われたという

事実から推察できる。もちろん、当時の体育哲学と1990年以降における体育哲学の学的形成の状況が、その内容や目的において単純に比較できるものとは思えないが、前出の前川の「方法や指導に限定されていた従来の體育研究の上に、體育の本質に關する研究が各方面から行われるやうになつた」という文章を裏付ける論文が、この1920年代から1930年代にかけて現出したのである。それらは体育哲学の必要性と学的形成に取り組もうという内容のものであった。1920年代から1930年代にかけて、体育哲学の萌芽がみられたと言うことができるだろう。

このように戦前の体育哲学の学的形成には1920年代の前後で段階的な変化がみられる。以下、「体育哲学」という用語を使用して、最初に「体育哲学」の学的形成を行ったと考えられる數川與五郎について論究していきたい。

## 4. 數川與五郎の体育哲学

日本の体育の哲学的考察や研究において「体育哲学」という用語を使用して、最初にその学的形成に努力した人物は、東京高等師範学校内に設けられた体育学会の主宰をしていた數川與五郎である<sup>29)</sup>。數川はその体育学会が1922（大正11）年に創刊した『體育と競技』という雑誌の編集長として活躍したが、彼の論説には、当時体育哲学の必要性を力説し、体育学の構築をめざした跡が伺える。

### (1) 本当の体育法

數川は1922年に地方体育研究所の設立の提唱をして、「本当の体育」を全国的に展開しようと尽力した<sup>30)</sup>。「本当の体育」とは当時の知育偏重をなげき、身体を忘れた教育に対する意見だけでなく、体育そのものに対する偏狭な見方を是正したいという思いがあった。具体的には、当時の体育が単に遊戯・競技の隆盛により急に勃興したかのような短絡的な評価をされていることに対する批判からも出てきたようである。そのことに対する數川の厳しい言葉がある。

體育は單なる劃一的、外觀美からは生まれませんよ。體育は所謂上手からのみは生まれませんよ。體育は所謂チャンピオンからは生まれませんよ。甚しいのは外國の種を、地味も肥料も考へずに、無闇に灌きたがる人があるが、そんなものからはペンペン草が生える位のもので、本當の體育は決して生長はしない<sup>31)</sup>。

数川の考えた「本当の体育」とは遊戯・競技の隆盛ではなく、彼が「教育の一職能であるべき、身体的養護、即ち體育的方面から、個性の尊重を叫ぶものに外ならぬ」と述べているように、個人の身体的資質の向上を目的とする体育であった。彼はそのために国が、①個性を十分に知ることが必要である。②只単に、その身体的個性を知ったと云うだけでは、其所に価値は見出されぬ。直ちにこれに応ずる體育的方面を講じなければならぬ。③身体的教育の理想を、何処に置くべきであるか、の問題を解くことを保障しなければならない、と主張している<sup>32)</sup>。

この時期、数川は国立体育研究所の設立を強行に唱えているが、国立体育研究所の設置案が浮上したにもかかわらず、なかなかそれが実行されないいらいだから地方の体育研究所設立の必要性を説き、「本当の体育」実現を訴えたのである。

数川は研究所設立の必要性和理由を明確にしたが、地方体育研究所の具体的な「方法や機関」についても述べている。それによると、各府県に一、若しくは二の研究所本部を置く。その本部は各種の便宜のために、各師範学校に付設することにする。そして此所に、調査部、実施部、報告部を置く、という綿密なものであった<sup>33)</sup>。このことは直接数川の体育哲学と関係ないように思われるが、「本当の体育とは何か」という体育の本質に関わる彼の思想を具現化しようとした取り組みとして注目したい。

数川らの熱意により、国立体育研究所設立案が議会に提出され、開設の見通しがつくや、数川はその国立体育研究所にいち早く「体育哲学の構成」を希望している<sup>34)</sup>。その内容は次のとおりである。

體育は單に流行に追はれた、其の場ふさぎの淺薄なものであつてはならぬ。少なくとも體育の研究は、其處に根強い礎石を置き得る普遍の原則を見出すことでなければならぬ。すべて吾人の生活には、立場を與ふべき哲學が必要であると同様に體育にも體育以前の立場、即ち體育哲學（運動哲學）がなければならぬ。體育は水草を追ふ遊牧民の態度であつてはならぬ。真切に自己を解剖し忠實に世界を達觀した人生の普遍の原則の上に體育を見出すのでなかつたならば百の研究も浮雲の如く力なきものである<sup>35)</sup>。

数川はこの「体育哲学の構成」とともに、「特殊医学（体育医学）の建設」も国立体育研究所に希望して、はじめて体育哲学の必要性を国に説いた。これには彼が「本当の体育」を実現するために「体育哲学の構成」が必要であることを主張していることがよく表れている。

## (2) 體育の理想主義

数川は、「本当の体育」のために国立体育研究所開設を実現し、「体育哲学の構成」を希望したが、その体育哲学に理想主義が必要であると主張した。体育哲学の理想主義とは、體育に独自で強固な目的が必要なことをいうが、彼は「體育の理想主義—體育の根據としての行為の哲學—」という論文でそれを述べている<sup>36)</sup>。

彼はまず「體育は目的か手段か」と題して、当時の知力全能主義や国民体力向上運動に関わる人々に疑問を投げかけている。彼は「然しかゝる人は尚體育を以て思考の奴隸とし知識の棒持者とするに終る。真に體育そのもの、價值を見出した體育の尊重者ではない<sup>37)</sup>」と述べ、體育が決して手段ではない、また他の手段の手段ではないと主張した。

彼はそれに関して「人間の目的は自己完成」だが、「體育は自己完成をなし得るか」と題して論を進めている。数川は「人は既成の真理によって活動するのではなく、活動によって真理を獲得するのである<sup>38)</sup>」と述べる。そして「生活の第一義をなすものは思考ではなくして行為である。思考は行為に有力なる補導を與へるが、行為の原動力ではない<sup>39)</sup>」と述べ、さらに「真理は知識によつて理解せらるゝものでなく行為によつて直覺せらるゝものである<sup>40)</sup>」とした。このことから、彼の體育の理想は自己完成であり、そのためには行為を通じての獲得による自己完成以外にないと結論づけている。彼は次のように述べている。

體育は思考ではない、體育は知識ではない。行為そのもの、活動そのもの、努力そのものである一誤解してはならぬ。體育が思考でなく、知識でないと云ふことは、體育に思考が不要であり、知識が不要であると云ふ意味でないことを。體育をして人生の第一義たらしめるためには、補導として知識を要する、思考を従属せしめることが重要であることは云ふをまたない。一即ち自己のための存在を明瞭に人格にまでおし上げるものは體育である、體育の努力である、體育の活動であり、體育の行為である<sup>41)</sup>。

この言説から、自己完成は知識や思考で達成されるものではなく、行為によって初めて達成されるという数川の主張が汲み取れる。つまり體育には體育独自の目的があり、それは體育の根拠としての「行為」によるものであり、その「行為」によって自己完成という真理の獲得にまで繋がっていくと言うのである。この「行為」について数川は明確な定義を説明していないが、いわゆる心（精神）と体（身体）の両面の働きを同時に伴った身体的運動のことを意味していると思わ

れる。

以上のように、數川の言う体育は何かの手段のために行うのではないという理想であるが、それは当時の「體育を知識の奴隷とし、生活の手段として考へる」見方<sup>42)</sup>に対する彼の批判からも理解できる。例えば、彼は国民体力の向上は自己の持つ知力を發揮するため重要なのだ、という考え方には、異論を唱えている。何かのために体育が利用されるのを極端に否定している。今日においても学校体育などにおいて、勉強の気分転換のための体育などの実態もみられるが、この考え方は体育の理想（目的）としては數川の論から言うところと否定される。つまり、本来体育で学ぶことがおろそかにされて、体育が何か他の目的のための手段になることを數川は否定する。

そして、「自己のための存在を明瞭に人格にまでおし上げるものは體育である、體育の努力である、體育の活動であり、體育の行爲である」<sup>43)</sup>という彼の考えから推察できるように、數川は知識や思考が自己完成をもたらすのではなく、行爲そのものが自己完成をもたらすものだとし、その行爲は体育により培われるものだと考えているのである。それは何かのための手段としての体育ではなく、第一義的目的、つまり真善美の獲得のための体育である。數川は次のように述べている。

吾人は體育そのもの、内に自己創作の藝術そのもの、美を發見する—體育の藝術化については又機會を持つだろう。—と共に體育そのもの、内に真理を主張する。體育は美の體現であると同時に體育は真理探究の順禮である。かかるが故に體育はやがて道徳善である<sup>44)</sup>。

數川の体育の理想は、最終的には体育の第一義的目的、言い換えると、真善美の獲得であった。

### (3) 體育の本質に関する問題

體育の理想を真善美の獲得とした數川は、次に「體育の本質問題とは何か」について論議している。これは「國立體育研究所に希望す—現今の體育諸問題と其の解決方策及國立體育研究所の研究内容提案—」という論文の中で述べられているように<sup>45)</sup>、新設される國立體育研究所の研究内容の一つとして「體育の本質に関する問題（一）」として「體育哲學（或は體育原理）を確立せよ」という希望として述べられている。彼はこの体育哲学の確立希望について次のように述べている。

この普遍必然の妥當性を有する立脚點即ち原理即

ち根本概念の探究は實に體育研究所の大なる任務であり、この解決を與ふるものこそ體育研究の玉座を占むものである。而してこの原理探究は少くとも人生そのものに出發して根本概念の反省内觀に入らなければならぬであろう。然らば人生とは何ぞや、此處に體育の原理探究はやがて體育の實在に関する根本概念の反省直觀となり、之を一つの知識的體系に組織する、體育哲學の構成となるのである。（今假りに體育哲學と稱す然しこれは妥當でないかもしれぬ）<sup>46)</sup>

數川は真善美の追究をめざす体育哲学を提唱したものの、当時の体育学の学的形成状況から、体育学の構成の問題が未だ残ると考えた。彼はこれについて「體育學なる特殊科學の構成の問題」として「體育の本質に関する問題（二）」と題して論述している。この時代にはこの數川の言説を裏付けるように、多くの体育研究者によって、この体育学確立の必要性が主張された<sup>47)</sup>。つまり、規範科学の上にその基礎を求めると体育の根本概念としての人間身体を研究対象とする独自の体育学の可能性が求められていたのである。事実、当時すでに医学や心理学の知識を体育に応用して説明する書籍が出版されていた。そのような状況から、この特殊科学としての体育学構成の確立を、國立體育研究所の研究内容として彼の体育哲学の確立より優先せざるをえない状況を、數川は当時敏感に察知したのであろう。

### (4) 體育学の根本問題

そして、1924（大正13）年に數川は「體育學とその根本問題」と題して、特殊科学としての体育学の構成が必要であることを論じている<sup>48)</sup>。

なぜ數川が特殊科学としての体育学の構成を優先したか。生理学的に、また解剖学的にいかにか体育はかくあるべきと言っても、それらは自然科学を基礎においた経験を取り扱うにすぎないので、因果観は引き出し得るが、目的観は出てこない。だから、体育の目的（つまり体育の理想）を語るためには「體育を考察する上に自然科学の見地以外に別途の考察法が存しなければならぬということを考えざるを得ない」<sup>49)</sup>と述べる。數川はこれに関して次のように述べている。

教育に理想があるならば、（中略）體育にも理想がある。然しその理想は體育から導き出されるものでなく、體育を導く他の科學の任務だと云うかもしれない。それは他の精神科學がこれを導き出し得るであろう。他の精神科學がこれを導き出し得ればそ

れで結構である。また精神科学は未だその最後の能力者ではなく、最後は哲学の領分に這入るものだと云はば、それでも良い。然しそれを以て體育が學ではない、ただ他の學の一応用たる具体的作用にすぎないと云ふならば、それは正當とは云えないだろう<sup>50)</sup>。

數川は、體育は既存の自然科学や人文科学の成果のもとに、身体的運動を考えればよいのではないか、という考え方に対して、體育固有の特殊科学が必要である事を力説しているのである。今日の體育生理学、體育心理学、體育科教育学など、體育学を構成する特殊科学の必要性を、數川はこの時期に感じていたのである。もっとも特殊科学としての體育科学については一部の科学ですでに、體育運動衛生学と題して書籍も出版されていたので、體育における特殊科学の必要性については、體育界でも既にある程度要求されていたのであろう。それは數川の次の文からも解る。

真に體育を體育たらしめ、真に體育をして力あらしむる爲には、體育の占むべき巨座を的確に掴むべきである。而してこの巨座を認識することは、即ち體育を統一して、これを科學的に組織することである。此處に體育醫學を生み、體育心理学を産み、體育物理學が成長する。而して始めて體育が科學として成立する時が来るのである<sup>51)</sup>。

數川は體育学がまだ実践中心の研究で、理論的研究が一般的でない当時の體育界において以上のような特殊科学としての體育学の構成が必要であることを述べたが、これは體育学の対象が、身体的運動の體育的か非體育的かを発見するという命題と、何故我々は身体的運動を為すべきか、その理由を求め、これ以上の理由はないというまでの命題があるということが前提となる、と言う<sup>52)</sup>。つまり、身体的運動が體育的で、その身体的運動を行う意味があるかぎり、独自の特殊科学としての體育学の構成が必要になると數川は主張したのである。そして、それは特殊科学としての體育学が必要であることの論拠にもなった。

## 5. まとめ

2005(平成17)年6月に、「體育原理」専門分科会が「體育哲学」専門分科会と名称変更された。そこで「體育哲学」は公的な形で認知された。しかし體育哲学は従来の體育原理の枠組みの中で事実上論議されてきた。それは主に1960年代以降の體育論の中で述べられてきたが、筆者は戦前にはその論議がなかったのか

という疑問を持った。そして戦前に體育哲学が論議されたかどうかを考察するために、1868年から1950年までの體育に関する関連の文献・雑誌の検索を行い、それらの中に體育の哲学的論議があるかどうかを調べた。

その結果、1900年初頭に勃興した體育の理論的研究において、高島平三郎が『體育原理』緒論の中で「體育の必要性」「體育の目的」についての理論的基盤を述べており、また「心身相關論」についてはさらに哲学の分野での論議が必要であると述べているが、この時期にはまだ「體育哲学」という用語は登場していないことが明らかとなった<sup>53)</sup>。

それに対して、大正後期から勃興した體育の哲学的考察に対する論議では、明確に「體育哲学」という用語が使用されて、学としての「體育哲学」の形成が進められた。特に1922年に數川與五郎は「體育哲學」という言葉を使用して、本当の體育とは、を論じ、體育の理想主義を語り、體育学の構成に尽力し、日本で最初に體育哲学の学的形成に努力した。

この數川の取り組みは、日本における體育哲学の萌芽と呼べるものであると考えるが、その根拠としては、第一に、それまでの體育における哲学的論議が個人的な論議であったのに比べ、国立體育研究所という公的な機関に、研究分野としてその必要性を要求した点である<sup>54)</sup>。2005年に「體育哲学」専門分科会が日本體育学会という公的な研究団体によって組織として認められた事情とは状況が異なるが、公的研究機関の研究分野に「體育哲学」の必要性を要求し、具体的な研究内容を提示した点で、これらは體育哲学の萌芽といってもよいだろう。

第二に、現在の體育哲学の研究内容は、前述したように大きく分けて2つあるが、そのうちの「體育の本質」究明について、この時期に萌芽がみられるという点である。つまり、「體育とは何か」ということを數川らは考えた。その内容は現在と同じものであるとは言えないが、體育の本質究明が體育哲学の研究内容として論議されたという点で、體育哲学の萌芽といってもよいと考える。

第三の理由は、現在の體育学の構成について論議された最初の時期であったという点である。それまで、個人的には體育運動衛生学や運動生理学などの書籍が発刊されているが、国立體育研究所を中心に、體育学の構成が研究されたのは1920年代からである。その意味で、それらの論議がなされた1920年代から體育学の基礎づけとしての體育哲学の萌芽もあったと言ってよいと考える。

## 6. 今後の課題

本研究においては、日本における体育哲学の萌芽とその代表的な学的形成を明らかにするために、体育哲学の学的形成に最初に取り組んだ數川與五郎の「体育哲学」を中心に検討した。しかし、戦前の体育哲学の全貌までは論究することができなかった。今後は特に1920年代から1930年代にかけての体育哲学の「学的形成」についての詳細な研究を行い、戦前の体育哲学の全貌を明らかにしていきたい。

### 【註】

- 1) 日本体育学会「(社)日本体育学会平成17年度総会議事録」『体育学研究』, 2005年, 517頁。
- 2) 川村英男『改訂体育原理』杏林書院, 1985年(初版は1959年)。
- 3) 石津誠『体育の現象学的機構(新体育学講座 第29巻)』逍遙書院, 1963年。
- 4) 阿部忍『体育哲学(新体育学講座58)』逍遙書院, 1981年。(初版は1972年)
- 5) 阿部忍は、会田勝、篠田基行、佐藤千春編「スポーツ哲学への志向」『体育原理研究の足跡を問う』「体育の原理」編集委員会, 1989年, 70頁で次のように述べている。  
  
 体育の目的, 目標を追究する分野を体育原理と日本では使っていますが, このことばは厳密に言えば, 体育の諸原理をふまえた上での原理, 言うならば, 原理の原理というべきである。しかし原理の原理では意味が不明瞭ですので, むしろ体育原理ということばの代わりに体育哲学と改めるべきであると。これが私の長年の主張なんですよ。
- 6) 篠田基行『体育思想史(新体育学講座 第63巻)』逍遙書院, 1973年。
- 7) E. F. ジーグラー(吉澤宗吉訳)『体育哲学』東京ベースボールマガジン社, 1976年。
- 8) ランドルフ, W. ウェブスター(篠田基行訳)『体育哲学の原理と展開』技術書院, 1978年。
- 9) E. F. ジーグラー(阿部忍, 飯塚鉄雄訳)『体育スポーツの哲学』不味堂出版, 1979年。
- 10) ポール・ワイズ(片岡暁夫訳)『スポーツとは何か』不味堂出版, 1985年。
- 11) 佐藤臣彦「体育哲学の課題」『体育・スポーツ哲学研究』28-1, 2006年, 2-3頁。
- 12) 佐藤臣彦『身体教育を哲学する—体育哲学序説—』

- 北樹出版, 1993年。
- 13) 樋口聡『身体教育の思想』勁草書房, 2005年。
  - 14) 瀧澤文雄『身体の論理』不味堂出版, 1995年。
  - 15) 関根正美『スポーツの哲学的研究』不味堂出版, 1999年。
  - 16) 石津, 前掲書, 3-4頁。
  - 17) 川村, 前掲書, 12-46頁。
  - 18) 阿部, 前掲書, 9-26頁。
  - 19) 篠田, 前掲書, 217-240頁。
  - 20) 木下秀明『体育スポーツ書解題』不味堂出版, 1981年や, 眞行寺太朗生, 吉原藤助『近代日本體育史』日本體育學會, 1928年, さらにインターネットではNACSISを利用して文献検索を行い, 「体育哲学」についての記述のあるものを調べた。
  - 21) 能勢修一『明治体育史の研究(第2版)』新体育学講座第37巻, 逍遙書院, 1971年, 75-76頁に「体操伝習所規則」が紹介されているが, それによると「体操伝習所ハ専ラ体育ニ関スル諸学科ヲ教授シ, 以テ本邦適當ノ体育法ヲ選定シ, 且体育学教員ヲ養成スル所ナリ」とある。体育に関する諸学科とは, 体操術, 英学, 和漢学, 数学, 理学, 図画などであり, 体操術の内容は体操に関する技術や方法が主であった。
  - 22) 高島平三郎『體育原理(四版)』育英社, 1904年。
  - 23) 同書, 54-57頁。  
 高島は「心身相關論」の節で「常識二元論」について述べている。しかし, 「タダ心身相關ノ事実ヲ説明シテ, 體育ノ原理ニ資セントスルニ過ギザルナリ」と述べているように, まだこれらは体育の哲学的論議として扱われていない。
  - 24) 前川峯雄『體育學の課題』教育科學社, 1947年, 1頁。
  - 25) 日本體育會『體育』, 1899-1914, 日本體育會『國民體育』, 1915-1936年。
  - 26) 東京高等師範學校内體育學會編『體育と競技』東京 目黒書店, 第1巻—第19巻, 1922-1940年。
  - 27) 次に挙げる論文に「体育哲学」についての記述がみられる。  
 ・大西要「體育哲學と體育學」『體育と競技』目黒書店, 第3巻第11号, 1924年, 27-33頁, および第3巻第12号, 1924年, 28-33頁。  
 ・トーマス・ウッド, ローサア・カーシイデイ(清水直三郎訳)「新しい體育哲學」『體育と競技』目黒書店, 第7巻第6号, 1928年, 60-62頁, さらに第7巻第7, 8, 9, 10, 11号, 1928年にもみられる。  
 ・飯塚晶山, 可兒徳, 吉原藤助, 赤間雅彦, 杉本正信(日本體育會編纂委員)編著『體育原理』東京

- 日本體育學會藏版, 1930年, 30-61頁。
- ・飯塚晶山「體育の哲學的基礎」『體育研究』體育研究協會, 第5卷1937年, 30-32頁。
  - ・三井孝文「身體文化—體育哲學序説—」『體育と競技』目黒書店, 第17卷第5号, 1938年, 103-106頁, さらに第17卷第6, 7, 8号, 1938年にもみられる。
- 他に前川峯雄が、『體育と競技』に数多くの論文を載せているが、「体育哲学」という名辞を使用しているのは『体育学原論』においてである。
- 28) 前川峯雄「哲學と體育運動」『體育と競技』目黒書店, 第19卷第1号, 1940年, 36頁。
  - 29) 「體育哲學」という用語は, 1901年に依田直伊が『體育教育』の中で, 「體育哲學之道案内」として使用している。ただし, これはまだ「体育哲学というものが考えられる」という意味で使用されており, 「体育哲学」の「学的形成」を行っているとは言い難い。
  - 30) 數川與五郎「本當の體育法とは一地方體育研究所の設立を提唱して當局者及實際家に訴ふ」『體育と競技』目黒書店, 第1卷第5号, 1922年, 2-8頁。
  - 31) 同書, 3頁。
  - 32) 同書, 8頁。
  - 33) 數川與五郎「本當の體育法とは(二)一地方體育研究所の設立を提唱して當局者及實際家に訴ふ」『體育と競技』目黒書店, 第1卷第6号, 1922年, 9-11頁。
  - 34) 數川與五郎「卷頭言」『體育と競技』目黒書店, 第1卷第7号, 1922年。
  - 35) 同書。
  - 36) 數川與五郎「體育の理想主義—體育の根柢としての行為の哲学—」『體育と競技』目黒書店, 第1卷第8号, 1922年, 2-5頁。
  - 37) 同書, 3頁。
  - 38) 同書, 4頁。
  - 39) 同書, 同頁。
  - 40) 同書, 同頁。
  - 41) 同書, 5頁。
  - 42) 同書, 3頁。
  - 43) 同書, 5頁。
  - 44) 同書, 同頁。
  - 45) 數川與五郎「國立體育研究所に希望す—現今の體育諸問題と其の解決方策及國立體育研究所の研究内容提案—」『體育と競技』第2卷第9号, 目黒書店, 1923年, 8-18頁。
  - 46) 同書, 13頁。
  - 47) 數川與五郎以外に, 『體育と競技』で, 大西要の「體育哲學と體育學」(1924年), 蘆田正喜の「體育學の建設と哲學的示唆」(1926年), さらに安川玄洋の「體育學の樹立へ」(1929年)など, 1920年代に体育学確立の必要性を主張する論議が多くなされている。
  - 48) 數川與五郎「體育學とその根本問題」『體育と競技』目黒書店, 1924年, 第3卷第2号, 3-8頁。
  - 49) 同書, 4頁。
  - 50) 同書, 4-5頁。
  - 51) 數川與五郎「體育學の構成につきて」『體育と競技』目黒書店, 第2卷第2号, 1923年, 卷頭言。
  - 52) 數川與五郎「體育學とその根本問題」, 前掲書, 5-7頁。
  - 53) 高島, 前掲書, 54-57頁。
  - 54) 數川は「國立體育研究所設立案提出の議を聞いて」(卷頭言)『體育と競技』目黒書店, 第2卷第2号, 1922年, の中で「吾人は國民體育伸展のため, 鎌田文相の英斷に衷心感謝せざるをえない」とその設立を喜び, 続けて「體育哲學の構成を希望する」と述べ, その実現の可能性も示唆している。しかし, 実際には國立體育研究所の研究分野には「體育理論」という形では取り入れられたが, 「體育哲學」としては取り入れられなかった。